

児童文学に見る価値観の相克が児童に及ぼす教育的効果

その2 Cynthia Voigt 著 *Homecoming* に於ける祖母と孫達の
家族観の相克がもたらすもの

稲 田 依 久

Effects of Struggles Caused by Different Views of Life Seen in Children's Literature

No. 2 Effects of Value Struggles between Grandmother and
Grandchildren in *Homecoming* by Cynthia Voigt

Iku Inada

抄 録

四人の子供達が母親の失踪を契機に誕生時から面識も音信もないままの祖母の家に出向き、共に生活するなかで家族・家庭観の相違から葛藤、相克を体験した後、両者が到達する相互理解と自己認識の意義を論じる。

キーワード：児童文学、家族観、出会い

(2000年9月13日 受理)

Abstract

This paper discusses the process and the effects of struggles caused by the different views of family between four children and their grandmother.

Key words: children's literature, family views, understanding

(Received September 13, 2000)

精神分裂病の孫が祖父を刺殺する、息子が父親また母親を撲殺する、娘が母親を惨殺する、父親が・母親が子供を絞殺・棄殺する・溺死・焼死させる、弟が兄を撲殺する、このようにたましい家庭内殺人が日本で頻度をまして社会問題としてしばしばとりあげられるようになったのは最初にあげた衝撃的な事件¹のあった1982年以來のことであるように思われる。それまでの日本の家庭は、かつての儒教・仏教思想を土台とした家父長制のもとに家族成員間の秩序が保たれた生活集団であり、外の世界である世間・他者という広がり、社会に対抗する内に向けての求心力を伴って結束し、仕事集団として成員の役割が明確な小社会であった。ところが昨今では、自分がその一員である家族を無条件に信じることができず、自分の家庭内における存在の意味をみつけられずに「家庭内でも居場所がない²」と感じる子供達が出現し、健全な親の役割を果たせない「アダルト・チルドレン³」と呼ばれる大人達、親として子供を育てる意味を把握しきれずに子供の欲求、要求に屈したり、子供の我儘を正すことなく放任する⁴「なあなあ関係の親⁵」が珍しくなくなっている。これを小川信夫は「集団と個との関係が溶け出した⁶」結果であるという。そしてこれが社会現象として「透明な存在としてのボク⁷」を生み出し、「援助交際」や「キレテ」暴力沙汰に及ぶ子供達を生み出すことになると思われる。「役割を演じるモデルとしての場⁸」である家庭で人の心の痛みを自分のこととして感じ合う、その共感の感受性こそ家庭における「役割をとる⁹」基本であると、またこれを「体の記憶¹⁰」とすることが大切であると小川信夫は言う。

以上のように家庭、家族の意味・役割が変化した現在の状況下で、崩壊し、歪曲された家庭、家族関係を修復することは困難な作業である。しかしながら築きうる家庭、家族の姿を模索することの可能性は変わらず存在する。この可能性を探る一端を呈している作品の一つに Cynthia Voigt 著、*Homecoming* があげられる。この作品は親子からなる家庭の崩壊、家族の離散を経て、幼い四兄弟姉妹が母方の祖母と共同生活を始めることで新たな家庭を築く可能性を示唆するものである。家庭を家族が生活を営む場であると定義するとして、家族とは何かを社会的見地から定義するなら「夫婦関係を基礎にしてそこから親子関係、兄弟姉妹の関係を派生させるかたちで成立してくる親族関係者の集団¹¹」、「感情融合を結合の紐帯としていること、ならびに成員の生活保障と福祉の追求を第一義の目標としていることにその基本的な特徴がある¹²」とする説がある。これに鑑みれば *Homecoming* の四兄弟姉妹は、家族を成立させる先ず第一の条件、夫婦関係を欠いている。というのも彼等の両親は未婚であり、その父親は六年前に失踪、その後、母親は精神を病んで十全な社会生活が営めず失職、家賃滞納から夜逃げを余儀なくされ、その直後母親が失踪するのである。家族の根底を支える親としての責務を担うべき夫婦がいなくなり、家族がともに一つ所に暮らして安定した生活を営む場としての家庭も失っているのである。しかしながら兄弟姉妹の関係は親を失った分だけより強固な絆となる。四兄弟姉妹は、互いの「感情融合」、即ち母親に対する愛情と、四人と一緒に暮らしたいという強い欲求をもって、互いを家族と認識し、無意識のうちに「成員の生活保障と福祉の追求を第一義の目標」としながら、失われた家庭を再構築することを目的として困難な旅に出る。途中、母

親の従姉妹の家に滞在するがここは四人が一緒に暮らせる可能性がなく、「感情融合」も伴わないが故に子供達にとっての家庭ではないことに気付いてまた旅に出る。その後、親切なサーカス団と生活をともにするがこれもまた「親族関係」に基づく家庭ではないとの結論を得て、母と直接つながる血縁者で唯一所在の知れている母方の祖母との生活を本能的に希求して、変人の風評のある祖母のもとへと出向くのである。即ち *Homecoming* は家族とは何かを、家族が崩壊した故に、追求せざるをえなくなった子供達の物語なのである。

それ故にこの四人の兄弟姉妹の家庭希求と獲得の旅には営々と持続する人の営みとしての家族・家庭の本来性と共に現代社会に於ける家族・家庭にまつわる問題点および可能性が提起されている。この稿では *Homecoming* の物語で著者 Cynthia Voigt が呈している祖母とダイシーの家族観、家庭観の相違がもたらす相克とその結果としての和解が呈示するところの現代における家族・家庭の可能性を、ダイシーの家族・家庭観から論じる。

I

まず *Homecoming* の位置付けであるが、そのタイトルが示す通り、祖母が独り住む母親の故郷に、未婚の母親に捨てられた四人の兄弟姉妹ダイシー（13歳）、ジェームズ（10歳）、メイベス（9歳）、サミー（6歳）が困難な旅を経た後、孫として帰って行き、祖母と共に暮らし始めるという物語である。長女であるダイシーが弟二人、妹一人の生存をかけたの責任を負いながら四人が安住できる場所を求めて子供だけで一日に5～6マイルしか進めない（p.105）徒歩の旅をする物語前半および母親の従姉妹の家での居候生活、自分達らしく生きるための最後の賭として変わり者の評判の高い祖母の家に行き着くまでの旅（p.5-p.236）は、六月初めから八月半ばまでの二ヶ月にわたるのであるが、四兄弟姉妹が家庭というパラダイスを求める「天路歷程」¹³ であり、また思春期を迎えようとしているダイシーの内的成長を記したビルドゥングスロマンである。¹⁴ この期間はダイシーにとっては社会と人間に対する理解を深めるとともに、弟妹理解を一層深化させ、同時に家族・家庭観を確立させるという飛躍的な成長の時である。而して後、物語後半で四兄弟姉妹はようやく見ず知らずの祖母アビゲイルの家にとどり着くが、その祖母は実の姉にも好かれたことがない（p.120）、変わり者（p.136-p.139, p.241）という評判で、容易には四人を孫として受け入れようとしなない。この祖母との出会いは拒絶との戦いであり、辛辣な言葉の裏に隠された真実と祖母の優しさを探る探究の日々である。ここでダイシーはそれまでの旅の間の成長の成果を発揮する。ダイシーは祖母の言動の奥に潜む彼女の真の姿を看破する洞察力を示し、その洞察ゆえに今度はダイシーとの出会いで祖母が自己理解、自己解放、自己受容を可能にする過程が描かれている。ここに至って、*Homecoming* におけるダイシーのビルドゥングスロマン、四兄弟姉妹の「天路歷程」は、子供達にとっての家庭の象徴である母親の生家で、母親の母である祖母との共同生活という新しい場を得て、家族・家庭の再創生という結実とダイシーと祖母との更なる内的成長を予感させながら完結するのである。¹⁵

上記のようなダイシーのビルドゥングスロマンとしての *Homecoming* であるが、家族・家庭観を主軸に据えると異なる側面が見えてくる。ダイシーの内的成長が祖母の自己解放につながるのは、ダイシーの家族観・家庭観の影響するところが大きい。即ち欠陥家庭、崩壊家庭から家庭喪失を経たダイシーはある種の諦観にも似た達観を得て、家族とは母親を中心にした直接の血族の無条件の愛情、信頼と結束を顕現させることであり、成員がそれぞれに自分達らしく生きることでありという信念を貫いた。¹⁶ 一方ダイシー達の母親の母である祖母アビゲイルは、彼女の夫の独断的、支配的言動に追随したことで子供達に去られてしまった過去を有しており、愛情や信頼、結束を希求しながらもそれらがかつて体験したことも、彼女の家庭に於いて実現させたこともないことが負い目になっている。その祖母にダイシーは彼女の持つ信念と共に家族・家庭に関わる敗北感と喪失感を祖母とは逆の立場から、即ち子供達の母親の母である祖母と孫達もまた一人の共通の親族、即ち子供達の母親であり祖母の娘であるライザ、を中心にして、崩壊することで喪失した家庭とは別種の血族による共同体を営むことで人間としての愛情、信頼、結束を共有するという可能性を、また自己実現しうるという可能性を信じさせたのである。¹⁷ これが家庭・家族観を異にしていたダイシーとその祖母との価値観の相克がもたらした意義ある結果である。両者の家庭・家族観の相違がもたらす相克の詳細を次章に記した後にダイシーがこの相克から得たものを呈する。

II

ダイシーと彼女の三人の弟妹は、両親が未婚のままに生まれ、父親が失踪し、母親も精神を病んだ結果とはいえ旅の途中の見知らぬ町に子供である彼等を置き去りにして失踪した後、自分達が未婚の母親の姓ティラーマンを名乗っている事だけが彼等を母親と結びつける縁であり (p. 138)、彼等が兄弟姉妹という血族である証であり (p. 108, p. 122, p. 163)、また未婚の母親として四人の子供を社会保障、福祉の世話にならずに自力で育ててきた母親への感謝と尊敬の表現であり (p. 64, p. 128)、かつ婚外子である彼等の存在を社会にむけて説明しうる唯一の根拠であり (p. 40, p. 192)、彼等が生きていく原動力である (p. 214) が故に、ティラーマンという姓に誇りと愛着をもっていた。彼等にとってティラーマン姓は母親との生活の思い出であり、母親の愛情を確信する手段であり、家族であることを確認する合い言葉であった。

一方で同じティラーマン姓、ティラーマン一族であることが子供達の母親や祖母に関しては全く異なる意味合いを帯びている。先ず母親であるライザは彼女の両親、家族について子供達に話すことは殆どなく (p. 83, p. 114, p. 137)、彼女の母親アビゲイルについて話をした時は悲しげであった (p. 214) という。次いで祖母アビゲイルにとってのティラーマン家については、母親の従姉妹ユニスの家に滞在して失踪した母親の行方を探してもらっている間に、情報をユニスの相談相手であるジョーゼフ神父が入手する。それによると子供達の母親ライザが育ったティラーマン一家は「不幸せな家族」(p. 138) であったというのである。近所つき合いもせず (p. 137)、家長、即ち子供達の祖父、が厳格で、

あまりにも厳しすぎたのか、または無慈悲だったのか、子供達には鞭をふるって言うことを聞かせ、いつも思い通りに事を運び、怒りに満ちていたという。(pp.138-139)。その妻アビゲイルは夫のいいなりで、自分の考えを言うことはなかった(pp.138-139)。それ故か長男はカリフォルニアに行っても音沙汰が無く、次男はベトナム戦争で戦死(p.137)、娘ライザは二十一歳の時に商船の船乗りであったダイシーたちの父親と駆け落ちして以来音信不通であった(p.138)。子供達に去られ、夫と死別した後、アビゲイルは車も持たず、交通手段としては舟を操り、電話もひかず、外の世界とは没交渉で全くのひとりぼっちで暮らしているという(p.139)。察するに子供達の祖母アビゲイルの結婚後の家庭生活、即ちアビゲイルにとってのティラーマン姓、は不幸の象徴だったといえる。このように同じティラーマン姓がダイシーとアビゲイルにとってはまったく違った意味合いをもっているのである。

このことはアビゲイルに会うまでダイシーの知るところではなかったのであるが、ダイシー達がユニスの慈悲にすがって生活している間にダイシーにとって生きる縁とでもいべき母親の象徴であるティラーマン姓に翳りをもたらし事実が明らかになる。それは学習障害の故であると思われるのであるが、知的発達障害ではないかと思われがちなメイベスが本当に障害を有しているのではないかとダイシーが秘かに抱いている不安を助長するかのように、祖母の孤立した隠遁生活や失踪前の母親の奇妙な行動がティラーマン族には何らかの精神的欠陥があることを示唆しているのではないかと(p.139)というジョーゼフ神父の報告である。このように意気阻喪するような情報に加えて、母親ライザが失踪後ボストンで保護され、回復の見込みのない精神の病である強硬症でマサチューセッツ州立病院に入院していると知らされる(p.158)。母親と共にかつてのような家庭生活が営めないことが明らかになるに至って、母親との家庭の象徴であるティラーマン姓へのダイシーの思い入れは変化する。ダイシーは母親と一緒にないのなら家庭など望まない、自分達が自分達らしくいられて、自分達にとっていいと思う所にいらればいい(p.168)という達観に達し、ティラーマン姓はかつての母親との幸せな家庭生活の記憶であると同時に新たにダイシー達四人の兄弟姉妹の結束と幸せの象徴となるのである。ティラーマン姓をめぐってのこのような家庭観の変化は、ダイシーに弟妹との生活の質の変化を希求させることになる。母親の出現と母親との家庭生活に希望を抱いていた間はユニスの慈悲にすがっての生活も暫時のことと我慢していたダイシーであるが、いよいよ四人が保護者としての母親を喪失したことが明らかになったことで、ダイシーは三人の弟妹の人生に全面的責任をおわなければならない。この視点で見ると、ユニスの家では兄弟姉妹が一緒に、かつそれぞれの性格や特徴を他者の誤解によって歪められることなく発揮し伸ばしていけないことが明らかになり(p.146-p.148)、ダイシーの望む最低限の条件すら満たせないという希望のなさ、既述のようにティラーマン姓がダイシー達に持つ意味の大きさが、ダイシーをして同じティラーマン姓の祖母アビゲイルとの生活に最後の期待を抱かせるのである。しかし祖母アビゲイルは上述のような不幸な結婚生活、家庭生活から人間不信に陥っており、怒りに満ち(p.245)、他者を素直に受け入れられず(p.245、

p.249)、人間嫌い (p.297) になって現実に適切に対処する意欲がないが故に農場も家も手入れが行き届かず、住人であるアビゲイルの心の反映であるかのように、荒廃するがまま放置されている (p.244, p.254)。このようなアビゲイルは長年の知己である食料品店主をしても「変人」、「風変わり」で「干渉しないことにしている」(p.241) 人物であるというのである。

ティラーマン姓が象徴する結婚生活に否定的な思いを抱いて家庭に対する希望も社会生活への意欲も失っている祖母アビゲイルと、ティラーマン姓が母親とかつて営んだそして永久に失われてしまった幸せな家庭の記憶の象徴であり、残された家族としての三人の弟妹の幸せとダイシーも含めた四人のティラーマン兄弟姉妹の結束と自己実現とを願うダイシーとが出会う時に生じるであろう葛藤は想像に難くない。アビゲイルとダイシーの間のこの葛藤は二人の個人的性格の違いがもたらすというよりは、むしろ性格の類似のゆえの反発によるものであり、二人の家族との生活体験の違いによる家庭観の相違がもたらすものであると言える。まず第一の性格的類似に関しては、アビゲイルの娘でありダイシーの母親であるライザがダイシーの意志の強さは遺伝であるといつも言っていた (p.9) ところであり、この同じ点をアビゲイル自身がダイシー達の滞在五日目に認めている (p.297)。更にアビゲイルと初対面のダイシーが切羽詰まった窮境にあつてのせめてもの矜持から強情にその晩泊まる場所もない事実を認めようとしなないのに対してアビゲイルが「私達はよく似ている」(p.251) とも言っている通りである。このような意志の強さ、強情さゆえにアビゲイルとダイシーはそれぞれ自分の意見や立場を固持しようとするあまりに相手に譲歩したり許容したりすることが容易ではなく、衝突することとなるのである。例えばダイシーがアビゲイルに会いに行った時、アビゲイルはダイシーを孫と知りながらも夫の死後に手に入れた自分自身に誠実な生き方を孤独であることで貫こうと決意していたがゆえに誰をも自分の生活に関わらせまいとする。¹⁸ そのうえアビゲイルは彼女の価値観のみを正当として他者を断罪しようとする。¹⁹ アビゲイルは自分自身の孤独希求の異常さや自己正当化に無理が生じて彼女の論理と言動が破綻していることを理解しており、そのような自分を「私はおかしくなっているのかもしれない」(p.248) と言うことで弁解するのである。そして家におくわけにはいかないというアビゲイルに対してダイシーがとる態度は「何を言う必要があるか」(p.249) という反発からの「唇をしっかりとじ」(p.251) での沈黙である。これに対してアビゲイルもまた「かたく唇をとじて」(p.251) 応え、二人はギラギラした目で互いを見つめる (p.251) ことで対立を確認するのである。この性格の類似ゆえの対立はダイシーには「戦争」であり、祖母アビゲイルとの衝突一つ一つは「戦場」であり、祖母は戦うべき「敵」なのである (p.265, p.274, p.284, p.289, p.292, p.297)。この戦いはダイシーにとっては一人彼女自身の個としての尊厳に関わる自己存在主張であるのみならず三人の弟妹を守り彼等の安全な生活を確保するための戦いであったがゆえにダイシーには失った母親を中心としての家族の意義をかけての、また母親の血をひくティラーマン一家の存在をかけての戦いであった。

ここにダイシーとアビゲイルの葛藤の第二の原因とのかぶりが生じる。ダイシーは当初

一人ダイシーとして祖母アビゲイルと意志の強さという性格的類似のゆえに対立し、葛藤が生じるのであるが、これは次いで祖母アビゲイルにとっては娘であり孫ダイシーにとっては母親であるライザを共有し、同じティラーマン姓を名乗る祖母と孫という親族でありながら15年にわたって音信不通、面識もない疎遠な生活ゆえにそれぞれの家庭での生活が異なっていたゆえに生じる家族・家庭観の相違がもたらす葛藤となる。二人の家庭観の相違はまた彼等の現状、即ちアビゲイルには建物としての家はあるがその中で共に生活する家族がおらず、ダイシーには弟妹という家族はあるが家庭を営む家がないのである。まずアビゲイルの現状を見る。四年前まで一緒に暮らしていた夫に先立たれたアビゲイルにとってはベトナム戦争で戦死した次男のみならずカリフォルニアに行ったままの長男も、またダイシー達の父親であるフランシスと出奔したまま音信不通だった娘のライザも「皆死んでしまった」(p.248) のであり、「それでほっとしている」(p.248) というのである。即ちアビゲイルにとっては子供達も夫もいなくなってやっと誰に遠慮することもなく、彼女自身の思い通りの生き方ができるようになり、「自分自身の人生を生きている」(p.295) と思えるようになったというのである。アビゲイルにとっての結婚・家庭生活は、結婚の際に夫に対して忠誠を誓った誓約を忠実に守ろうとしたあまりに自分を偽り、言いたいことも言わずに夫に従う (p.295) 生活であり、その結果三人の子供達を失うという失意にみちたものであった。そのようなアビゲイルの家庭観は彼女がダイシー達に前庭のカジノキについて説明した言葉に如実に表れている。アビゲイルは針金で幹を補強してあるカジノキが家族と同じである (p.257) と説明する。高い枝をはり、葉を多くつけるカジノキは弱い木で、枝葉の重みで木が裂けてしまうので、幹を針金で補強するのだと言う。のびた枝である子供達が幹である家庭を破壊するというのである。ここにはアビゲイル自身が彼女の家庭にとってカジノキを守る針金と同じ役割を果たし得た、即ち子供達の立場にたつことで家庭を崩壊から守れたかもしれないのに、夫に対する忠誠のほうを選んだがために幹である家庭そのものを裂いてしまった過去の認識と痛恨とが彼女の中に根強くあることがうかがえる。アビゲイルが家庭を守り得なかった事実が彼女をして家庭・家族に対して悲観的な考えを抱かせ、否定的な姿勢をとらせているのである。普通一般の家族ならば何の抵抗もなく受け入れられる事柄に対して殊更に否定的であったり無視する態度をアビゲイルはとるのがそれである。例えばサミーがアビゲイルに「僕たちのおばあちゃんなの？」と問いかけたときには頷いて応えながら、続いて「なんて呼べばいいの？」(p.253) という質問には聞こえないふりをして無視するのである。また息子の一人が作ったヨットをダイシーが見つけた誰のヨットなのかとアビゲイルに尋ねた時に、息子の名前を答えればよいものを取ってそれを避けて現在の所有権がアビゲイル自身にあることを言う (p.261) のである。加えて蟹をとるための仕掛けにいれる餌をとり船着き場に行きたいというダイシー達に対して、思わず祖母としての配慮から末子のサミーが泳げるかどうかを尋ねながら、送り出す前には「好きにしなさい」(p.265) としか言えないのである。子供達がスイカズラの蔦を刈りながら四人で歌をうたっているのを聞いて誰に教わったのかと興味をしめすのであるが、ジェイムズが「ママが歌ってくれた」と答え、サミー

が「僕たちのママに歌ってあげたの？」とアビゲイルに尋ねると、殊更によそよそしく「覚えていない」(p.271)と誰の耳にも不自然な嘘をつくののである。アビゲイルのこのような態度は彼女自身が言うように「もう家族はいらない。また失敗してしまわないように」(p.297)という過去の家庭崩壊への責任を痛感してのことである。しかしながらアビゲイルの心の奥には彼女の本来の性質が、アビゲイル本人には意識されていないままながらも、まだ息づいているのである。それはダイシーと出会って昼食を共にした後、ダイシーが町の船着き場に残してきた三人の弟妹をアビゲイルの船で迎えに行った折、残してきた場所に三人が見当たらず、ダイシーが必死になって探している時、アビゲイルもダイシーと共に走って探しているのである(p.252-p.253)。また家に泊めた四人の孫達の話しを聞いたがって質問を次々と投げかけもするのである(p.262-p.265)。しかしアビゲイル本人はそのことを明確に自覚してはおらず、よそよそしい態度を孫達に対してとり続けるのである。滞在二日目にスイカズラを刈っている子供達にアビゲイルはカンタロープメロンをおやつに出す(p.271)優しさをもちあわせているのだが、「レモネードはないからメロンを食べるかおやつなしか」(p.271)と、とる必要もない挑戦的な態度をとるのである。またダイシー達の滞在第二日の夕方、第三日の朝、そして第四日の夕方に「明日は出て行くことになるのだろう」(p.274, p.275)と同じ言葉を四人の孫達に対して発するが、これは出て行くようにという命令ではない。むしろダイシー達の予定を確かめるといった口調であり、ここにはアビゲイルの躊躇、逡巡が表れているといえよう。アビゲイルは表面上頑なに孤独を選び、孫達に対しての優しい気持ちや愛情を持つまいと決意しているのであるが、彼女の心の奥にはどこかで孫達にいてほしいと願っているところがあると思われる。ダイシーが翌日の仕事の予定を言うとアビゲイルはそれ以上出て行くことには触れようとしなことがこれを証明している。ここにも三人の子供達に去られてしまった過去の家庭にまつわるアビゲイルの心の傷の深さが見受けられる。しかしこのようなアビゲイルもダイシー達の滞在第五日には「今日の予定は？」(p.280)と尋ね、「台所で手伝いがいる」(p.280)と言うようになるのである。がそれでもアビゲイルはまるで罰に甘んじるかのように過去の家庭崩壊の象徴であるようなカジノキのある前庭と大きな家を所有しながら共に住む者としてなまに孤独な生活を送っているのであり、アビゲイルにとっては家族・家庭は脆いものであり、彼女自身がその脆い家庭を守りきることができなかったという敗北感のゆえに家族・家庭は希求してはならないものとなっているのである。

一方ダイシーは婚外子として法的に父親を持たず、血縁による実の父親も出奔してしまったことで実質上の父親も失い、夜逃げで借家を出たことで家を失い、母親にも去られ、さらにはその母親が精神を病んで植物人間状態になって入院中であることで、家庭も唯一の保護者も失い、過去に母親が注いでくれた愛情と現在ダイシーが弟妹に注いでいる愛情のほかには家族にまつわるものは何もないのである。そしてその家族愛だけを武器に家族に対して否定的な祖母アビゲイルと戦うのである。ダイシーの弟妹への愛情は、母親に去られてから二か月間子供達四人のだけの生活をする間に、長子として弟妹に責任を感じる

だけではなく、親代わりの保護者として三人の弟妹をその生活においてだけでなく精神面に於いても支え、守ろうとする原動力となっている。ダイシーの三人の弟妹への愛情の基本を支えているのは当然ながら先ず弟妹の存在である。ダイシーにとっての弟妹の存在の大きさは、先にも述べたところであるが、彼等の行方が知れなくなった時のダイシーの反応に明らかである。それはダイシーが弟妹に町の船着き場で待つように言いおいて一人で祖母アビゲイルの家を訪れ、祖母からつれない扱いを受けながらも祖母の家には泊ることができることになってアビゲイルと共に弟妹を迎えに船着き場に戻って来たとき、三人の姿が居るべき場所に見当たらないという事件が起きた折のことである。夏であるというのにダイシーは弟妹を失ったかもしれないという恐怖から寒さを覚え、心臓が痛むような動悸を打ち、ダイシーを孫と認識しながらも祖母らしい態度をとろうとしないアビゲイルの反応にも頓着せずに三人の弟妹を探すようにと命令するのである (p.252)。すぐにサミーが見つかりダイシーの弟妹喪失の恐怖は解消するのであるが、ダイシーにとっての弟妹の存在の重要性が如実に表れている箇所である。加えてジェームズとメイバスが徒歩で祖母の家に向かったことをサミーから聞いて、すぐに祖母の舟で家にとって返し、ジェームズとメイバスが無事に到着していることを確認しようとするのであるが、この時も二人の姿を探してダイシーは舟溜まりからサミーと共に走るのである (p.254)。弟妹がいればこそダイシーは生きる意欲を持つことができるのである。そしてその意欲は母親ライザが失踪して以来の二ヶ月の間ダイシーが自身と弟妹の生存をかけた旅を続けてきた自信に裏打ちされて、祖母との戦いへとダイシーを向かわせる力となるのである (p.262)。

ダイシーにとっての祖母との戦いの理由は、弟妹と四人で暮らせるようになりたいという一心からの祖母説得を目的としての祖母への挑戦である。しかもそれはもう他に可能性の残されていない最後の戦い (p.262) であるが故に敗北することが許されない戦いであり、二ヶ月間のダイシーの努力はこの戦いのための準備であったかのようにさえ思えるほどのものなのである (p.262)。この戦いはある意味では「負けるが勝ち」、即ち変わり者の風評の高い祖母の意に添った言動をとることで気に入られれば、祖母の家での生活が可能になるものである。がダイシーは相手におもねることで弟妹それぞれの性格的特質が損なわれたり、四人の結束が脅かされたりする可能性があることから、彼女達四人の兄弟姉妹にとって最善ではないことをユースとの生活で既に学んでいた。それゆえダイシーは敢えて困難な方法である真っ向からの対決を、しかしながら注意深い計画をたてて四人が有用であることを祖母に気付かせるようにしむけながら (p.262, p.265, p.267)、選ぶのである。ダイシーがこの正攻法を選んだのにはもう一点理由がある。それは祖母が傍目には風変わりで家族や家庭に対して否定的であるように見えようとも、彼女の内実と本質はその外見とは異なっていることを看破している (p.267) からである。ダイシー達が祖母の過去の家庭にまつわる辛い体験を思い起こさせるテイラーマン姓を名乗っているが故に一緒に暮らしたくないと思っていると同時に、いなくなっしてほしいと思っけない (p.267) と直感するのである。ここに至ってダイシーは単に滞在する家を手に入れることだけが祖母との戦いの理由ではなく、加えてこの引き裂かれた自己を有している

祖母の本質を見極めることが、また矛盾した祖母の思いの奥にある祖母の本心を知ることがダイシーの為すべき事である (p.267) と思に至るのである。上記二点の理由からダイシーは祖母と熾烈な戦いを始めることになる。

ここでとりあげるのは第一点のダイシーの家族愛からの祖母アビゲイルとの戦いである。弟妹の保護者として食べ物と滞在場所を確保したダイシーは彼等の精神面、即ち弟妹の本質に触れる部分や性格の特徴に関わる事柄に関しては彼等のあるがままのよさを守るために祖母の都合や独り合点を断固許さない姿勢で臨む。弟妹に関わる事柄でダイシーがアビゲイルに対してとる態度は「喧嘩ごし」(p.262)であったり「怒り心頭に達して」(p.264)いたり、家事に関して弟妹の代わりをかってでたり (p.269)、「いらいらして」(p.273) いたり、「怒りを噛みしめ」(p.282)、「家族に関しては他人がどう思うかではなく自分が正しいと思うことを為す」(p.284) ために「弟妹を守るために頑張る」(p.283-p.284) のであり、「アビゲイルを無視」(p.291) することまで取ってするのである。これらは一人ダイシーのみならず三人の弟妹をも巻き込んだ母親ライザ・ティラーマンの子供達対娘ライザの母アビゲイル・ティラーマンの戦いなのである。しかしダイシー達は滞在第五日までの四度の大きな意見の対立という戦いには勝利をおさめる。この勝利はすべて家族愛がもたらしたものである。最初の戦いは滞在初日に四人の子供達の母親ライザがかつて子供達を愛していたこと、またその母親の愛情を子供達が確信していることがアビゲイルを黙らせたことによる勝利である (p.265)。第二の勝利は滞在第二日のダイシーが小競り合いと呼んでいるものであるが、ダイシーの計画、何か役に立つことをすることでアビゲイルの歡心をかう、であるスイカズラの蔦刈りの予定を話した折、ジェームズがその知性と知識を「繁茂」、「寄生植物」という語で披露したことでアビゲイルが感心するという、孫に対する誇らしい気持ちを祖母であるアビゲイルが感じたことによるものである。第三の勝利は第三日の夕食時にアビゲイルが孫達のスイカズラの蔦刈りの仕事ぶりを誉めた後、ジェームズにチキンのお代わりをすすめた時のことである。ダイシーがアビゲイルが「言ったことをではなく、言わなかったことを聞いた」(p.274) ことでダイシー達がアビゲイルに勝ったことを知ったというのである。これはアビゲイルがダイシー達四人が役に立つ存在であることを認めて好意をもったことを、言い換えれば祖母アビゲイルが孫達に愛情に似た感情を抱いたことを確信したという意味での勝利である。第四の勝利は第五日にサミーが行き先も告げずに一時間以上も出かけた後ずぶぬれで帰って来たとき、悪いことをしたと認めようとしないうサミーを見て、アビゲイルはサミーを厳しく躰る必要があり、罰を与えないのかと言ったにも関わらずダイシーがサミーを弁護した時のことである (p.282-p.284)。この時はダイシーのサミーに対する理解と愛情がアビゲイルを黙らせたのであるが、この時のダイシーとアビゲイルとの対決はかつての子育てに対するアビゲイルの信念、即ち厳しく躰て反抗させずに言うことをきかせる、と真っ向から対立するものであり、ダイシーがそれを否定したことでアビゲイルを否定し、同時にアビゲイルの過去の家庭にまるわる心の傷に触れてしまったことでアビゲイルの感情を完全に害してしまったことになったとダイシーは悟るのである。そしてこのダイシーの弟妹

への愛情が、彼女が弟妹を愛するがゆえに得ようとした滞在場所を所有している祖母の反感をかうことになって、結局のところ長い目でみた時の弟妹の幸福を手に入れ損ねることになるのではないかと心配することになるのである。「この一回の戦いに勝つことで祖母との戦いに敗れるのではないか」(p.284)とダイシーは心配するのである。

その予想通りに敗北がダイシーに訪れる。それは滞在第六日におきる最後の、第五回の戦いである。第四回の戦いと同様、サミーが行き先を告げずにまた出かけたことでアビゲイルとダイシーが対立する。ダイシーの意見も聞かずにアビゲイルがサミーに罰として夕食を食べさせないと言ったことに対してダイシーが夕食をとらせず空腹にさせることがサミーに対する罰としてふさわしいものではないがゆえに、その必要はないと反論する(p.290)。これがアビゲイルをいたく怒らせる。ここでダイシーはアビゲイルの言うとおりにすれば四人のそれ迄の努力で得てきたアビゲイルの好意と歓心とを持続して受けることができると分かりながらもダイシーは自分がサミーに対して、家族に対して正しいと思うことをしないわけにはいかない(p.291)、弟を、家族を守らねばならない(p.290)という思いから殆ど本能的に敢えてアビゲイルに反論する。そしてアビゲイルはダイシーに最後通達として家に置くわけにはいかない(p.292)と答えるのである。この敗北はダイシーがサミーという人間を深く理解しているがゆえの弟への、家族への愛情が、実はアビゲイルが希求してやまない家族愛であるにも関わらず、アビゲイル自身がかつて営んだ家庭の記憶と体験から自由になっていないがゆえに理解できずにいることからひきおこされたものである。アビゲイルが切望しながらも再現不可能なものとして諦めている真の家族愛を眼前にしなが、アビゲイルは自らを開くことなく、今度はかつてのように夫の主導権に甘んじたという言い訳のきかない自らの選択として、過去の失敗を再現してしまったのである。一方ダイシーは自らの行為がひきおこした結果に愕然とすると同時に敗北感を感じてはいたが(p.292)後悔はしていない。これは一にダイシーが自ら正しいと思うところを為したという、自分自身を裏切ることとはしなかったと同時に弟サミーをそして家族を裏切りはしなかったという、人間として正しいことを、家族愛の本然をなしたことへのせめてもの矜持であると思われる。

III

以上がアビゲイルとダイシーとの相克である。ダイシーが弟妹への愛情ゆえに祖母アビゲイルと幾度も対立し、サミーの嫉をめぐって決定的に決裂した結果、ダイシーは四人の兄弟姉妹がアビゲイルの家で一緒に暮らし、それぞれにとって良いと思える生き方を選んでいこうと考えた将来への計画が潰えてしまったのである。そしてここでダイシーは未来への期待を抱いて進んで行く先を失ってしまったのである。がダイシーは母親失踪後、何度も窮境に直面した折と同様この状況をも受け入れる。アビゲイルと決裂したその夜中に目をさましたダイシーは、期待したことは期待しただけ、ただの計画でしかないのだから(p.293)、出て行かなければならないのなら出て行って新たな可能性を探そうと決意するのである。しかし「見えない物を心の目で見」(p.293)ようとしたダイシーは祖母の家

こそがダイシーのいるべき場所であると直感的に悟るのである。その時、ダイシーは台所の灯りがついているのに気付いて下りていくとアビゲイルがひとり台所のテーブルで手紙を書いている。その祖母を見てダイシーは初めてアビゲイルを美しいと感じるのである(p.294)。誰かを美しいと思うということはその人物に好感を抱いているということである。「いい敵だからいい友人になれるかもしれない」(p.280)とジェイムズに語っていたダイシーは、戦いに敗れて初めてアビゲイルを「いい友人」と認めることができたのである。しかもこの時ダイシーは初めてアビゲイルを敵としてではなく一人の人間として見たのである。そしてこのダイシーの心の、思いの変化がアビゲイルの心を開かせるのである。これはアビゲイルがダイシーと話しながら微笑むことで(p.294, p.295)、またそれまで誰にも話したことがないアビゲイルの結婚生活について、過去の家庭生活について話したこと(p.295-p.298)、ダイシー達四人と一緒に暮らしたい気持ちはあるのだが経済的理由からそれが困難である(p.295)と同時にアビゲイルが自分の子供達を幸福にする責任を果たせなかったがゆえに二度と同じ責任はとりたくない(p.297)ことを告白することで、そしてダイシーと似ていること(p.297)、メイベスは知的障害をもっていないと分かっていること(p.294)、四人の孫達を大事に思っていること(p.298)をダイシーに告げることに明らかである。またライザがダイシー達の父親フランシスと結婚しなかったのは、ライザがアビゲイルのようになりたくなかったから(p.296)であることも話す。結婚することで夫に忠誠を誓い、そのことで自分を偽って不幸になることを避けたかった、母親アビゲイルを不幸にした父親が許せなかった(p.297)からであるというのである。ここに至ってダイシーは母親ライザが未婚の母として、また自分達が婚外子としてたどってきた苦勞が実は祖母アビゲイルの結婚生活、家庭生活における不幸に因していることを悟るのである。

祖母アビゲイルの結婚の不幸が彼女の三人の子供達の不幸、ことに母親ライザの娘時代の不幸に、未婚の母としての家庭生活の不幸に、ひいてはダイシー達四人の孫達の苦境につながっていることを知ったダイシーは彼女が生きるうえで支えとしてきたティラーマン姓がじつは家族・家庭生活に於ける負け犬の敗北の象徴であることに気付くのである。「皆敗北者だ」(p.298)とダイシーはその夜ひとり床で泣くのである。がダイシーは泣くのはこれで終わり、もう泣かない(p.298)と決意するのである。この決意はダイシーがそれまで漠然と抱いてきた家族・家庭の幸せへの幻想が完全にこわされてしまった幻滅と失意、ダイシー達を大切に思ってくれる祖母とは経済的理由から一緒に暮らせずに彼等と暮らすことを望んでいないが経済的余裕があるというだけでユニスの慈悲にすがって一緒に暮らさなければならぬだろう将来の苦境、ダイシー達をかつては愛してくれたがもはや保護者としても母親としても頼りにすることのできない入院中の母親ライザという現実をすべて受け入れて生きていこうという決意である。これを支えるのはダイシーにとってはそれまで通り、また同時にそれまで以上に、弟妹への愛情と責任である。ダイシーがこれまでのティラーマンとしての家庭生活に関して、祖母と母親の家庭生活をも含めて、敗北者であったとしても、これからの弟妹との家族関係、生活に関しては母親の失踪後ダ

イシーが決意した通り何処にあっても自分達らしく、しっかり自分を持して生きていくことしかない (p.297) という思いである。ここには将来への明確な展望も希望もない。ダイシーが到達したのは希望も心配も、また少しでも気をゆるめると牙を剥いて襲いかかってくる失望も抱かないことにする (p.302) という現実をそのままに受け入れる生き方である。13歳の少女にとっては酷な現実容認である。がダイシーは自分自身を含めて四人の兄弟姉妹が一所懸命に自分達らしく生きることの意味を見出しているのであり、弟妹を愛することに真摯であるという点において実存的生き方を選んでいるのである。これこそが祖母アビゲイルとの相克からダイシーが得たものである。

ダイシーとアビゲイルとの家族・家庭観の相違をめぐる葛藤はダイシーのみを成長させたのではない。「天地創造」と同じく六日を要したアビゲイルとダイシーとの葛藤が行き着いた七日目の「安息日」は、暫くの間でしかないがユースの許へ戻るまでの間は祖母と孫達が共に生活するというアビゲイルの決定によってもたらされる。(p.298)。これによってダイシー達はその間地元の学校に通うのが良からうということになり、第八日には入学の手続きのためにアビゲイルが孫達を町の学校に連れていく。この時ダイシーとジェイムズがアビゲイルに税金や生活にかかる費用を蓄えから支払うのではなく、農場で野菜やクリスマスツリーを栽培したり鶏や牛、豚を飼うことで稼ぐことを勧める (p.304-p.305)。そしてその理由としてダイシーは自分達がいられないとしてもアビゲイルには今の家に住み続けてもらいたいから (p.305) だと説明する。第六日の夜にアビゲイルを美しいと思い、優しいライザの子供達であるがゆえに家庭に関してかつてと同じ失望をアビゲイルに感じさせることはしないと保証し、第七日にはアビゲイルが好きだ (p.299) と自覚したダイシーが示す好意が、六日間の葛藤の間に過去の家庭生活と自分自身とを直視せざるをえなかったアビゲイルに最終的な一歩を踏み出させるのである。アビゲイルはダイシーから勇気を与えられるのである。住めるわけでもないアビゲイルの家や農場の心配をし、一緒に暮らせるわけでもないアビゲイルの生活の心配をするダイシーにアビゲイルは自分の思い通りに躰ける対象としての孫ではなく、人生を生きる同志としての孫を発見するのである。アビゲイルもダイシーも家庭生活には希望を抱けずにいるのであるが、その希望のなさが逆に家庭への過剰な期待なしに共同生活ができる可能性をアビゲイルに確信させるのである。過去の家庭生活の失敗ゆえに臆病になっていたアビゲイルが彼女の隠された本質として奥深いところで感じ続けている孫達を大切に思う気持ちを、愛情を、表現してもダイシーはそれを受けとめてくれると信じる勇気をアビゲイルは与えられるのである。「意地ははらない。あなたたちには負けた」(p.312) とアビゲイルは素直に自分の気持ちを表現するのである。ダイシーの弟妹への愛情の深さ、正確な現実認識と率直で恐れることのない生き方は祖母アビゲイルにも自分自身に正直に生きるという自己同一性をもたらすのである。

かつての家庭生活における敗北者であったアビゲイルとダイシーは、それぞれの家庭が崩壊したことで敗北を認めざるをえなかったのであるが、この現実受容こそが敗北をふまえて新たに生き始める原動力となることを二人の生き方は示している。家庭への希望のな

さゆえに家族に対する過剰な期待もその結果の失望もなく、家族を一人の人間として愛することで足下の現実を過不足なく見つけ判断して自分自身が懸命に生きることで、家族を信頼することができるという、本然の人間関係にたった「家族・家庭」生活をダイシーとアビゲイルの葛藤と和解は示唆しているのである。

注

- 1 1982年7月5日付け 朝日新聞 23面 齊藤勇氏 死亡記事
- 2 「溶ける家族と子どもたち」小川信夫 玉川大学出版部 1998 p.11
- 3 同上 p.44 アメリカで1980年代に使われたようなアルコール依存症の親に育てられたが故に成人後も精神的に不安定さを訴える大人ではなく、「家族として機能しない親に育てられた心の傷をもつ人」の意味で用いられている
- 4 同上 p.28 「子どもの情緒的な側面に反応してしまう親」、「実現できなかった感傷的な願望の象徴として子どもを見ている」親
- 5 同上 p.206
- 6 1997年の神戸での少年殺害事件をひきおこした少年の言
- 7 「溶ける家族と子どもたち」p.11
- 8 同上 p.191
- 9 同上 p.192
- 10 同上 p.207
- 11 「現代家族の社会学」石川実 編 有斐閣ブックス 1997 p.4
- 12 同上 p.4
- 13 *Homecoming* の物語の前半、四人の子供達の徒歩旅行、はその構成にジョン・パニヤン著「天路歷程」との類似がみられる。この点については拙論「ビルドゥングスロマンと *Homecoming* (Cynthia Voigt 著) にみる Dicey Tillerman の成長」(1998年度大阪私立短期大学協会研究報告書)を参照頂きたい。
- 14 ダイシーの内的成長を描く物語としての *Homecoming* についての論究は上掲拙論「ビルドゥングスロマンとしての *Homecoming* (Cynthia Voigt 著) にみる Dicey Tillerman の成長」を参照頂きたい。
- 15 この点に関しては *Homecoming* の続編である *Dacey's Song* 参照。
- 16 この点に関する詳細は「Cynthia Voigt 著 *Homecoming* にみるダイシーの家族・家庭観」(大阪女学院短期大学 紀要29号)を参照頂きたい。
- 17 祖母アビゲイルがダイシー達四人の孫から得たものについては拙稿「人間の存在を支えるものー児童・青少年文学にみる その1」を参照頂きたい。
- 18 ドアを叩く音が聞こえていたにも関わらず居留守を決め込もうとする (p.244)、居留守をつかうなら姿を見せねばよいものを一方で娘ライザの子供に会ってみたいという気持ちを抑えきれずに裏庭に面したドアの前に座っている (p.245)、裏庭までやってきたダイシーを怒りに満ちた目付きで不法侵入していると詰る (p.245)
- 19 出ていくようにと言いながら台所に入ってきたダイシーを追い出すでもなく家族や住居についての質問をし (p.246)、昼食にありつこうとしていると非難しながらダイシーに昼食をふるまい (p.247)、食べた後ダイシーが出ていこうとすると後かたづけを手伝おうとしないと非難し (p.248)、メイベスが知恵遅れかどうか尋ね (p.250)、行儀作法などもちあわせていないと公言し (p.250)、泊まる場所はあるのかと尋ねてダイシーが旅を続けるので滞在する場所はいらないと答えると嘘をつくなど詰ってダイシーがアビゲイルの家に泊まりたがっているのは明白だと決めつけ (p.250)、アビゲイルはダイシー達の親族の一員だから泊まるといいと言う (p.250)
- 20 ダイシーの弟妹への愛情が親代わりの保護者としての様相を呈している例は以下の通りである。

- ・祖母アビゲイルと初めて対面して彼女の言動が三人の弟妹を驚かせ、怯えさせると感じたダイシーは優しく弟妹に接してやって欲しいと祖母に頼む (p.251)
- ・クリスフィールドの船着き場に残してきた弟妹の姿が見えなかった時のダイシーの狼狽ぶり (p.252)
- ・アビゲイルがメイベスに返答を強要した時のダイシーの怒り (p.264)
- ・朝おきたらベッドを整えるようにとアビゲイルが言った時にダイシーが弟妹のベッドを整えることを申し出る (p.269)
- ・腱鞘炎で痛む右腕のせいでメイベスがミルクをこぼした時にダイシーが布巾でテーブルをふいて、アビゲイルの詰問に怯えたメイベスにかわって腕が痛むのだと答える (p.279)
- ・サミーが行く先を告げずに出かけて戻って来たとき、罰を与えるべきだとするアビゲイルに対してダイシーはサミーと愛情で結ばれている限りはサミーを信頼できるとして罰を与えない (p.283)
- ・再度サミーが行く先を告げずに出かけて戻って来たとき、食事を与えないとするアビゲイルに対して、サミーへの罰は空腹ではなく自転車に乗ることを二日間禁止することであるとダイシーが断定する (p.291)

参考文献

- Bunyan, John. *The Pilgrim's Progress* 1678 (「天路歷程」高村新一訳 バニヤン著作集Ⅱ1969)
- Friedan, Betty. *The Feminine Mystique* Dell Book : 1979
- 石川実 編「現代家族の社会学」有斐閣ブックス 東京 1997
- 小川信夫 「溶ける家族と子どもたち」玉川大学出版部 東京 1998
- Voigt, Cynthia. *Homecoming* Atheneum New York : 1983